

尋小學修身書 卷三

仁 9

10

3

9 50 1 2 3 4 5 6 7 8 9 60 1 2 3 4 5 6 7 8 9 70 1 2 3 4 5

文部省檢定濟

伯爵副島種臣  
伯爵東久世通禧

著 閱

尋常小學修身書 卷三

東京 國光社圖書部

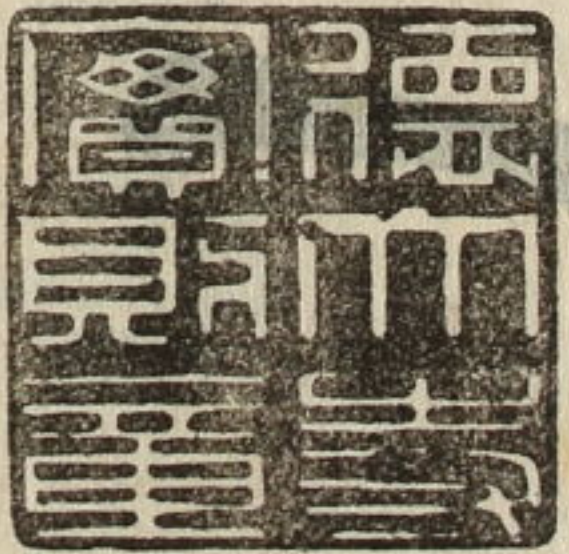
仁門  
號 10  
卷 3

其威 德一

小學修身書 題三 國光社發行

明治二十五年壬辰六月

侍從長勳等侯爵德壽實則題



小學修身書卷之三

東久世通禧著

副島 種臣 閱

第一

○父母、先生より、勅語を、讀みきかせらるゝときは、頭を下げ、つゝ、みてきくべし。

○天皇陛下、皇太后陛下、皇后陛下、

皇太子殿下、親王殿下の御事を申  
し奉るときは、必、叮嚀なることば  
を用ゐるべし。

○われらの、日日、安く、世をわた  
るは、みな、

天皇陛下の、あつき御めぐみなれば  
つねに、御恩に、むくい奉らんこと  
を、わするべからず。

○國に、二君なく、民に、二兩主なく。

聖徳太子十七條憲法

○忠をいたし、命をすつるは、人

臣の道なり。必、これを、身の高

名と思ふべからず。北畠親房神皇正統記

○「ふとよりも、なほいや高き、父

母と、君の恵を、わするなよ人。」

白河樂翁侯退閑雜記

○楠正行は、正成の子なり。正成、湊川のたゝかひに、ゆくみちにて、正行を召し、をへけるやう、われ死なば、汝、われにかはりて、君をまもりたてまつり、みかたのもの、一人にても、生きのこりてあらば、再、いくさをたこして、朝敵をうち、君の御心を、やすめ奉れよといひて、



かへしけり。この時、正行、十一歳  
 なりしが、よく父の教をまもり、  
 つねの遊にも、朝敵をうつまねをし  
 て、しばらくも、忠義の心を  
 はなれざりしかば、成長の後、數度の  
 大功を立て、つひに、河内國の四條  
 暇にて、忠義のために、うち死せり。

第二

○父母より呼ばるゝときは、入直に  
 へんとたて立ち、何事もすて置き  
 て行くべし。  
 ○用事をいひつけらるゝときは、  
 すみやかにつとめて、怠ることなか  
 れ。用事をへなば、つゝみて、  
 の由をいふべし。  
 ○つかひに行くときは、往來に立ち

とゞまりて、ひまどるべからず。早く行き、早く歸りて、使の次第を申すべし。

○父母は、天地の如し。實語教

○父母の恩、きはまりなきこと、

天地にひとし。父母なくんば、何

ぞ、我あらん。貝原益軒大和俗訓

○人として、不孝なるは、人たる

本心を以て、禽獸にも、たど

りたりといふべし。室鳩巢六諭衍義

○橘、逸勢の女は、うまれつき、いた

りて、孝行なりき。その父、罪あり

とて、遠き所に流され行くを、か

なしみ、あとより志たがひゆき、守

のものに叱られければ、ひるはど

まりて、よるはゆきけり。父、途に



ては死したれば、したひなげきて、  
 はかのかたはらに、いほりをつくり、  
 朝夕、うやまひつかへたり。その後、  
 みづから、父のうかばねを負ひて、  
 京にかへりたるに、みる人、みな、  
 涙を流して、其の孝行をほめたり  
 き。

第三



○兄弟は、弟妹を愛し、弟妹は、兄弟を敬ひ、互に、親切にして、何事も助けすくはざるべからず。

○弟妹は、兄弟に、悪しき事ありとも、うらみいかることなく、ますますやはらぎ従ふべし。

○兄弟は、弟妹に、善からぬ事ありとも、誤りかきの、しらずして、きつづ

かに、道理を良言ひきかすべし。

○兄弟は、同胞の、たしむ、父母

出につぎたる天倫なり。貝原益軒初學訓

○我より先に生まれて、遂には、

父に代はる人なれば、父母につぎ

て敬ふべきは、我が兄にあらず

や。室鳩巢六諭衍義

○兄は、父につぎて尊ぶべし。弟

は父母の子なれば、我が子より愛すべし。貝原益軒初學訓

○大坂に、お富と云ふ小女ありき。ある夜、三人の賊、家に入りて、兄の仁三郎に、刀をさしつけて、金を出だせと云ひけり。此の時、お富は、わづかに、十歳なりしかども、弟の吉藏を、我が身の後にかくして、持



ちたる錢を 取り出だし、之にて、  
 兄の命を 助けたまへと云ひければ、  
 賊いかりて、刀のせにて、お富をう  
 ちぬ。お富は、うたれながら、刀の  
 下に、我が身をよせて、さらば、己  
 をころし、兄を助けたまへと云ふ。  
 其のありさま、まことに、あはれな  
 りしかば、賊も感心して 立ち去り

けり。

第四

○人には、年上なると、年下なると  
 あり。年上なるを、長者と云ひ、年  
 下なるを、幼者と云ふ。  
 ○長者の年ごろ、父にひとしきは、  
 父の如く敬ひ、年ごろ、兄にひとし  
 きは、兄の如く敬ふべし。

○長者と、道を行くときは、其の後に従ふべし。長者と坐するときには、其の下に就くべし。

○長幼の道は、序を主とす。會澤安迪

彛編

○老を敬ふこと、父母の如くせよ。幼を愛すること、子弟の如くせよ。

實語教

○父方母方ともに、一族のうち、年たかき人をば、るれぐに、禮義をつくして、ねんごろにすべし。

室鳩巢六諭衍義

○源雅實は、右大臣顯房の長子なり。雅實、小兒のとき、父と外祖父隆俊とに従ひて、御所の内をめぐりし事あり。其のころ、御所の内に、靴

を持つ者の、從ふこと能はざる處ありて、位高き人も、皆はだしにて、其の處を通れり。雅實、かねて此の事を知り、かばみづから、二つの靴を、ふどころに入れて從ひぬ。やがて、其の處に至り、ふどころの靴を取り出だして、二人にはかせければ、隆俊、深く、雅實が孝心の



己にまで 及べることを感ず、涙を  
ながして よろこびたり。

第五

○朋友は、善人を江らびて、親切に  
交はるべし。悪友には、一たしみ近  
づくべからず。

○朋友、相あつまるときは、無益の  
たはぶれをなさず、書物を讀み、文

字を書きなどして、互に、知らざる  
所を問ふべし。

○朋友の、病にかゝりたるときは、  
速に、見舞に行きて、其のようだ  
いを問ひ、病苦をなぐさむべし。

○人は、善友にあはむことを、こ  
ひねがふべきなり。麻の中の蓬は、  
ためざるに、たのづから直すと云

ふたとへあり。十訓抄

○「月花に、うつりやすかる、身の

とがも、いさめあふころ、嬉しか

りけれ。鰻玉集

○朋友は、信をあつくし、互に

善をすゝめ、惡をいましむ。是

朋友の道なり。貝原益軒初學訓

○稻葉迂齋は、十三の時、三木信成

と云ふ人にあひて、學問すべきこと

を聞き、それより、書物を讀み初め

ぬ。又、伴部安崇、赤井真義の二人

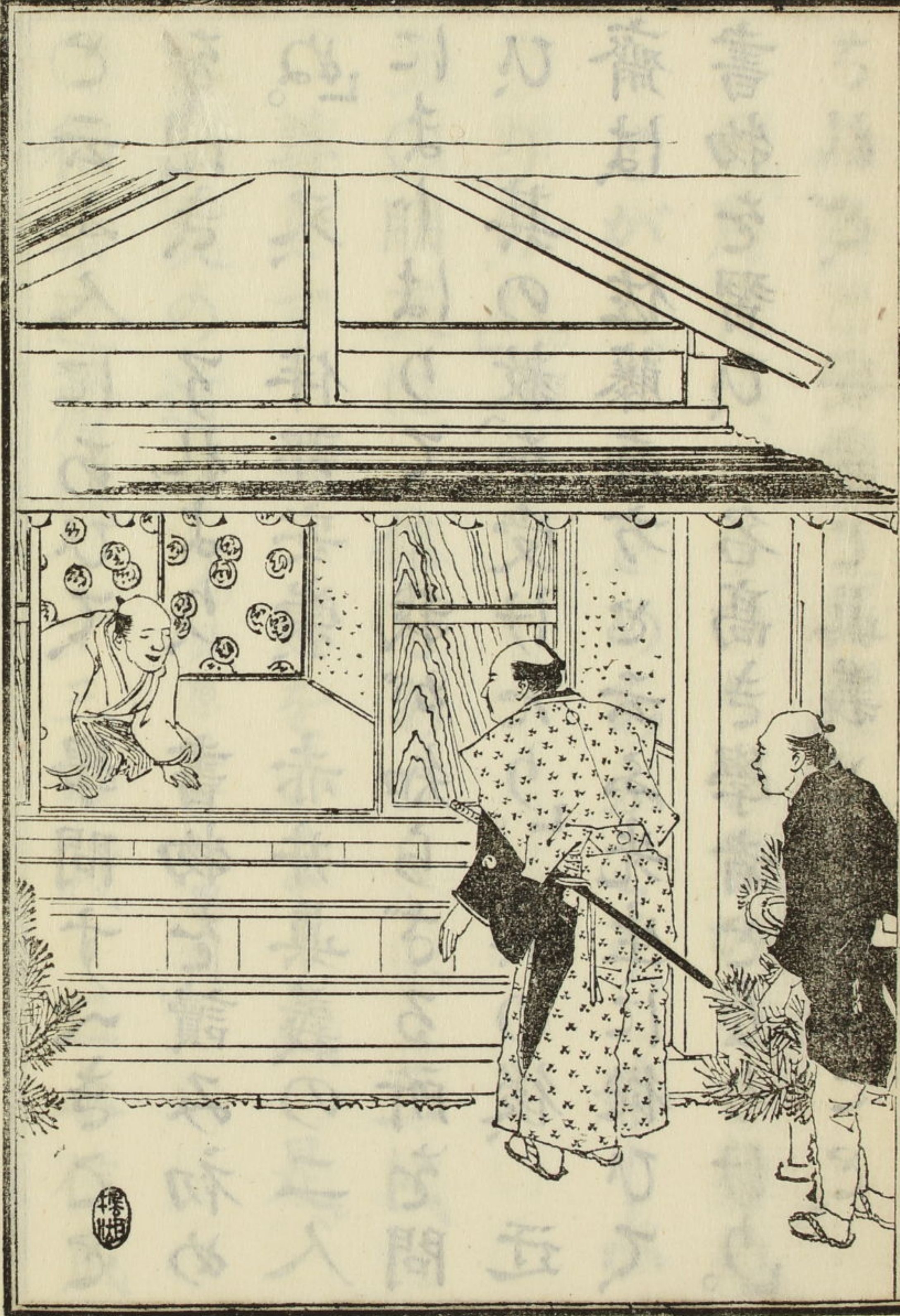
にまづはりて、我が知らざる所を問

ひ、其の教を受けたり。其の後、迂

齋は、佐藤直方と云ふ先生に従ひて、

書物を習ひ、名高き學者となりけり。

されど、安崇と真義とを敬ふこと、



小兒の時にかはらず、此の二人の死ぬるまで、年頭、歳暮の禮をかくことなかりき。常に云ひけるやう、吾は、此の二人の爲に、學問成就したりと。

第六

○身を修むる道は、第一に、言葉を少くするに在り。言葉多きときは、



過チも、亦多かるべし。故に、人は、  
言葉を少くして、過チなからんことを  
思ふべし。

○我が知りたる事も、問ふ人なくば、  
みだりに言ふことなかれ。吾レより、  
好みて、知りたる事をほこるは、善  
からぬことなり。

○問ふ人ありとも、我が知らざる事

は、是レかならず、言ふことなかれ。我  
が知らざる事を、知りたるやうに  
言ひなすは、禍をまねく本なり。

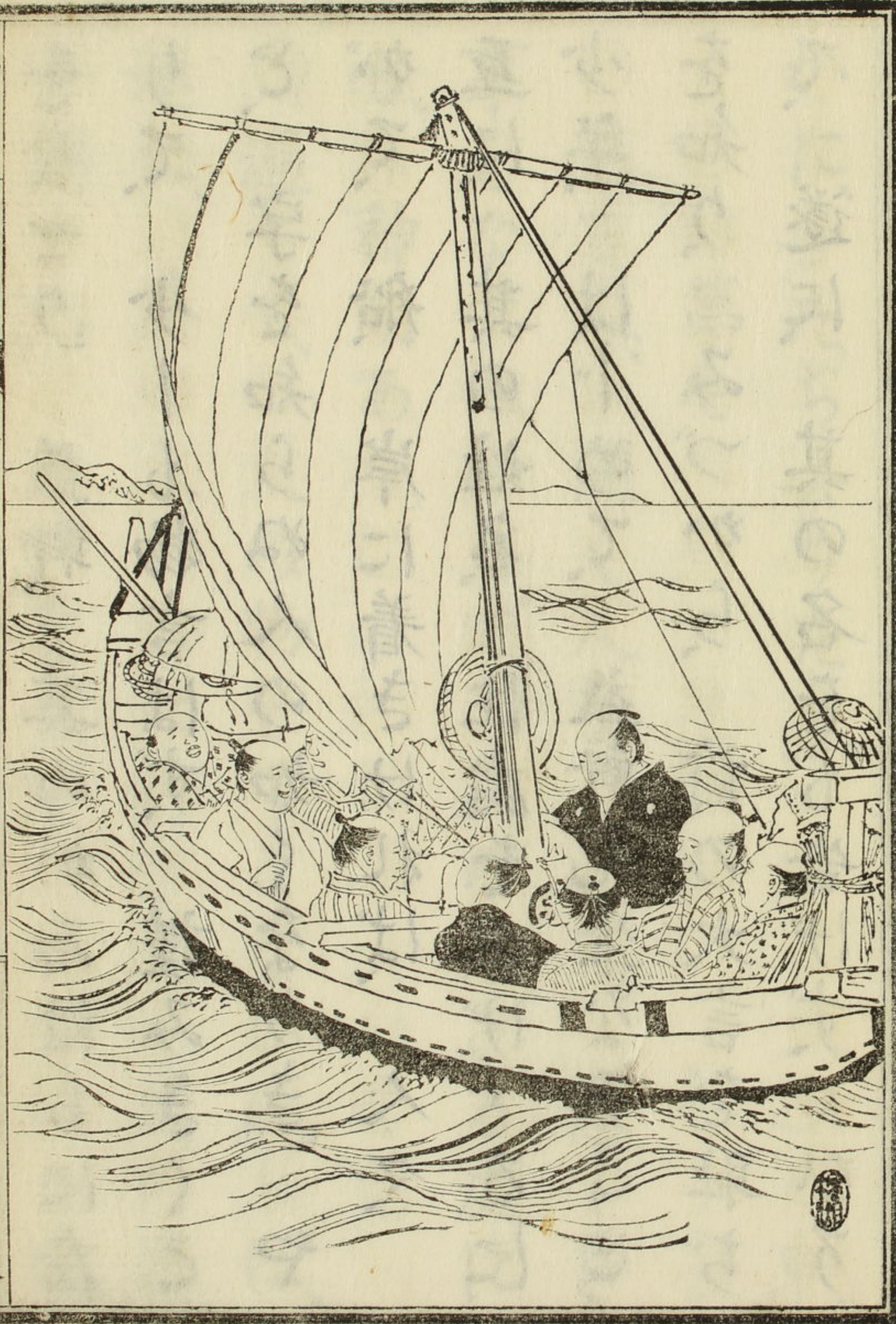
○口は、是レの禍の門、舌は、是レの  
禍の根。童子教

○舌三寸のさへづりに、五尺の身  
をはたす。和漢古諺

○人の事いはんより、ひぢあかた

とせ。浅瀬のーるべ

○貝原益軒は、筑前の人にて、名高き學者なりき。ある年、京都より、筑前に歸るとき、船に乗りて行きけるに、乗あひの人々、互に、名を知らざれども、いろくの話をしてたり。其の中に、一人の少年ありて、人々を見下り、物知がほに、書物の講釋



をなせり。益軒、其のかたはらに在りて、少しも物言はず、謹みきくこと、字を知らぬ人の如くなりき。やがて、船岸に着きければ、人々互に、其の姓名、住處を告げらるに、少年はドめて、益軒先生なることを知り、みづから、前の大言を耻ぢて、遂に、其の名をも告げず、ひろ

かに、あたち去りたり。○第七のや、思ふ心の、善一悪○見る人、聞く人なりとて、悪一き事をなすべからず。人の見ざる處にも、神明あり。○人の物をうこなひ破らば、速に、其の人の許に行きて、己の罪を謝すべし。かならず、いつはりか

くすことなかれ。

○道にて、遺ちたる物をひろはゞ、直に、其の持主にかへすべし。持主知れざるときは、父母尊長に告げ、又は、警察署に届け出づべし。

皇后陛下御製

○ひとりのみ、思ふ心の、善一悪を、てらゝわくらむ。天地の神

○神は、正直の頭にやどる。漢語大和

日暮 故事

○悪一き事をして、必竟、あゝかいらぬことやあるべき。たまく、幸に、して、禍にのがると云ふとも、

何ぞ、頼むにたらん。室鳩巢六諭衍義

○伊藤東涯は、名高き學者なり。ある日、一つの小囊の、路に遺ちたる

を見て、薬ならんと思ひ、從者に拾はせて、開き見くに、其の内に、十兩あまりの金ありたり。東涯ねどろきて、遺主の來るを待ち、返しやらんとて、其の處に立ちどまり、久しく待ちたれども、遺主來らずして、日暮になれり。其の頃は、警察署もなかりければ、せんかたなくて、家



に歸り、囊を、棚に上げ置きしが、後に、伊勢の人に頼みて、大神宮に奉納したり。

第八

○人には、忍耐といふこと、甚肝要なり。忍耐とは、如何なる難儀にあふとも、耐へ忍びて、撓むことなく勉むるをいふ。

○事をなすには、たほかた、困難の出で来るものなり。されども、之を避けんとして、はぐめの志を變ずることなかれ。

○幾たび失敗すとも、少くも撓まず、ますます勉めて、怠らざるときは、いかなる事にて、成し得らるべし。

○念力、岩をとほす。漢語 大和故事

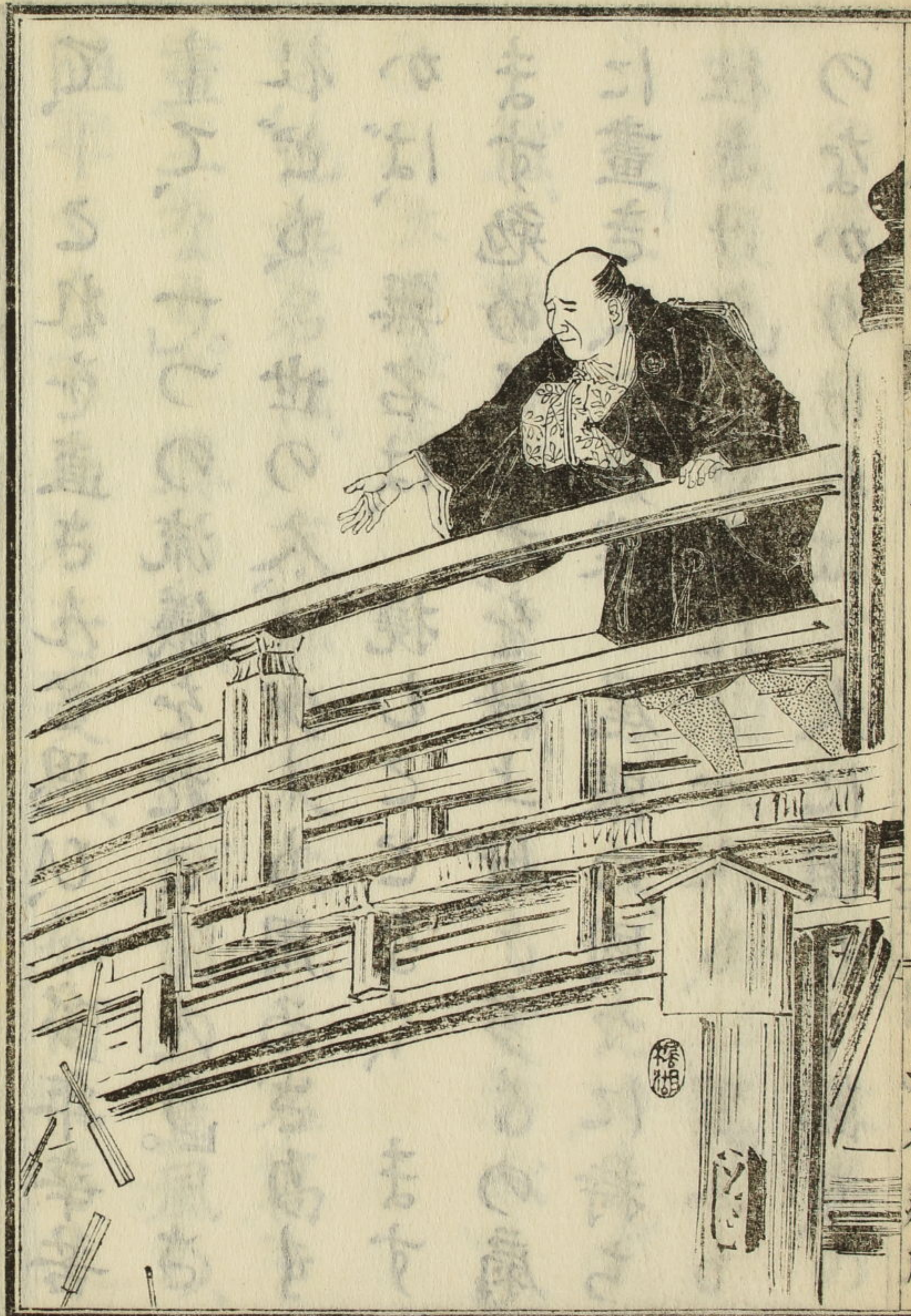
○成就することの少きは、敢爲の氣象の少きに由れり。金言万集

○「立てろむる、志だに、たゆまずば、龍のあぎとの、玉もとるべし」。

大國隆正

○池無名は、京都の人にて、名高き畫工なり。其の初、我が國の畫風の陋しくなりたるを憂へ、如何にも

て、これを直さんと思ひ、多年辛苦して、一つの流儀をたこしたり。されども、世の人、少しも用るざりしかば、無名は、撓むことなく、ますます勉めて、之を仕上げ、多くの扇に畫きて、美濃、尾張の國々に持ち行きけり。さるに、一人も、買ふものなかりければ、大に困りて歸り、



瀬田の橋にて、其の扇を、皆、水中  
 に投げ棄てたり。通常の人ならんは、  
 疾く思ひ止まるべきに、無名は、  
 猶も屈せず。これ、我が力の足らざ  
 るならむとて、いよく勉勵せしかば、  
 後には、其の名、大に顯れて、人々、  
 皆、其の畫を貴び、争ひて、之を購  
 ふに至れり。



第九

○人は、常に、いかなる物も、大切に  
にして、ろまつにすべからず。物を  
大切に、ろまつにせざるは、儉  
約の道なり。

○紙くづ、又は、糸くづのごとき、  
些細の物も、大切に、しまひ置くこ  
きは、思のほかに、用立つ事あり。

かならず、粗末にすべからず。

○父母尊長より、錢を與へらるゝ  
ときは、無用の物をかははず、無益の  
事につかはせずして、大切にたくはへ  
置くべし。

○塵つもりて、山となる。和漢古諺

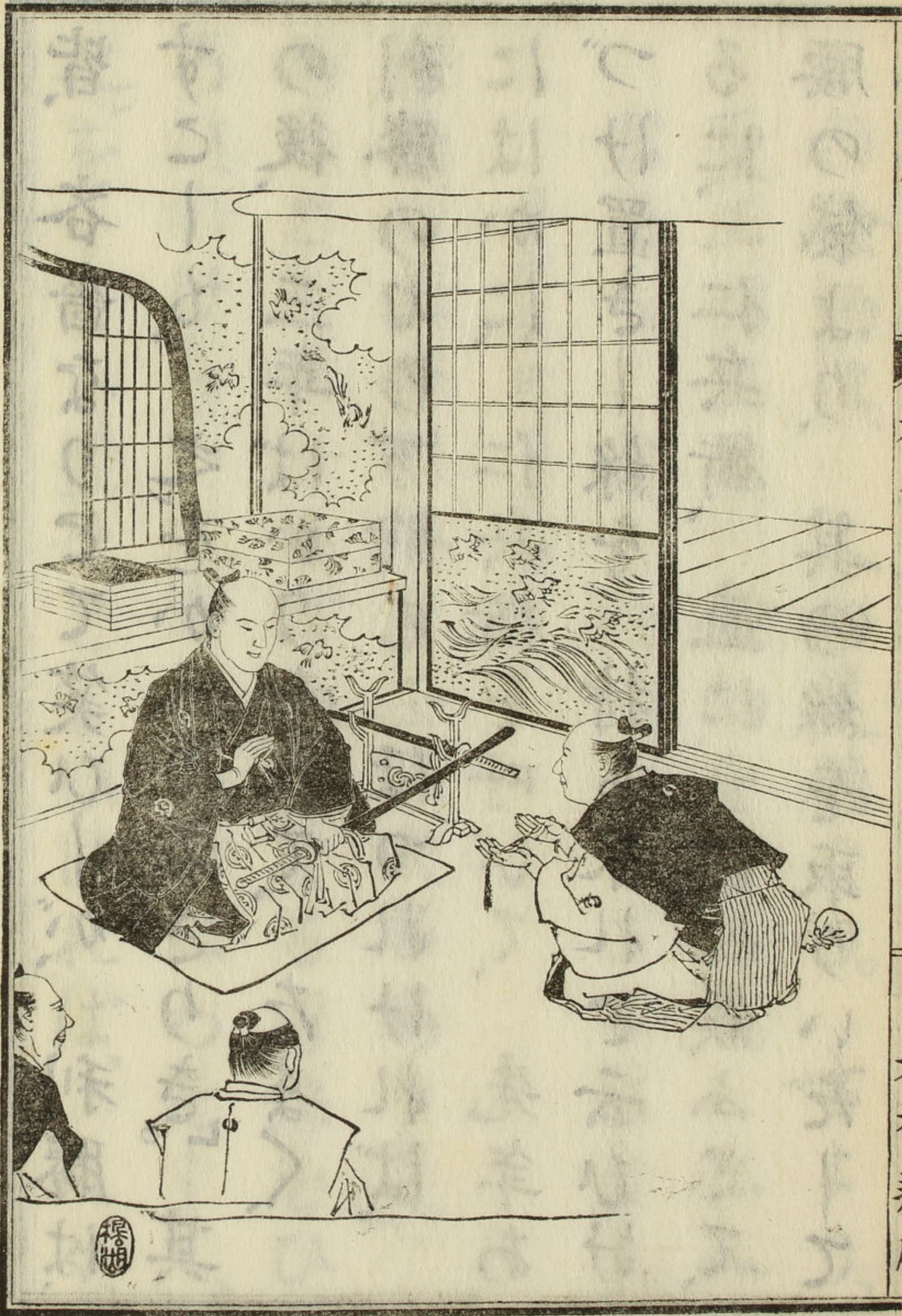
○困窮は、儉約ならざるよりたこ  
れり。貝原益軒家道訓

○儉約は、人の美德なり。古より、  
聖王明主は、儉約を行へり。仁人  
君子も、亦、儉約ならざるはなし。

貝原益軒家道訓

○昔、土井利勝と云ふ大名ありき。  
あるとき、一尺ばかりなる唐絲をひ  
ろひ、けらい大野仁兵衛にわたして、  
之をしまひ置けと言ひければ、人々

皆、吝嗇なりとて笑ひしが、利勝は、  
すこしも、之をかへりみざりき。其  
の後、三年ばかりをへて、たまく、  
利勝の刀の下緒のほつれければ、  
にはかに、仁兵衛を呼びて、先年あ  
づけ置きし絲を、持ち來れと云ひけ  
るに、仁兵衛、直に、茲に候ふとて、  
腰の袋より、其の絲を取りいだして



さしあげたり。利勝が大に喜びて、手づから下緒のほつれをむすび、家老寺田與左衛門をまねきて、我大野仁兵衛が、正直にして、主人の命にうむかぬを、奇特に思ふなり。よりて、祿三百石を、増しあたへよと云ひつけたり。」

第十

○人は、物をさなき時より、物借るくせをつくへからず。この癖、一たびつくときは、一生の禍となるべし。故に、いかなる物にても、なるべく、不自由を忍びて、借ることなかれ。○是非なき用事ありて、人の書物又は、品物を借りたるときは、叮嚀にとりあつかひて、お返しがいやぶるべ

からず。用事ををへなば、すみやかに返すべし。ながくとめたくべからず。○をさなき時は、あけて、金錢のかりをなすべからず。もし、是非なきことありて、父母尊長のゆるしを受け、人の金錢を借りたるときは、すみやかにかへすべし。借りて

かへさざるは、耻づべき事なり。

○借の一字は、家をやぶるもととなれば、不借の二字をまもるべし。

貝原益軒家道訓

○人の器物を借ることを好むべからず。須用ありとも、己むを得ざるにあらざれば、不自由を忍ぶべし。貝原益軒家道訓

○すべて、人の書を借りたらむには、速に見て返すべきわざなるを、久しく止めたくは、心なし。

本居宣長玉勝間

○佐伯子剛と云ふ人、ある時、人より、わづかの金を借りたり。其の後、之をかへさんと思ひに、其の人の居るところを知らざりしかば、出



づるにも、入るにも、金をふところ  
 にして、人を見れば、かならず、貸  
 主のありかを問ひぬ。かくして、遂  
 に、其の人にあひて、之を返したり。  
 ○三浦梅園と云ふ人、常に云ひける  
 やう、まづいき時は、まづいきに安  
 んどて、まづ人に、人物を乞ふべからず。  
 乞食の、人に嫌はるゝは、物を乞へ

ばなりと。是の故に、梅園は身を  
終ふるまで、人に物を乞はざりき。

第十一

○人は、をさなき時より、常に、慈  
悲の心を失ふべからず。人の不幸を  
見るときは、我がことのやうに思ひ  
て、ねんどろに、いたはりめぐむべ  
し。

○親類、朋友に、木まづ、いき人あらば、  
我が持ちたる物を、分けあたへて、  
をくむことなかれ。其のまづ、いきを  
笑ひて、物をほどこさざるは、人の  
道にあらず。

○下男、下女たりとも、みだりにた  
ひつかふべからず。我が暑きときは、  
彼も暑く、我が寒きときは、彼も寒

かるべしと思ひやりて、慈悲を加ふべし。

○身をつみて、人のいたさを知れ。

並本朝俚諺

○たよる人は、慈悲の心あつく、人をあはれむを、第一とす。松平定信

自教鑑

○慈悲は、草木の根ぞ。人の知は

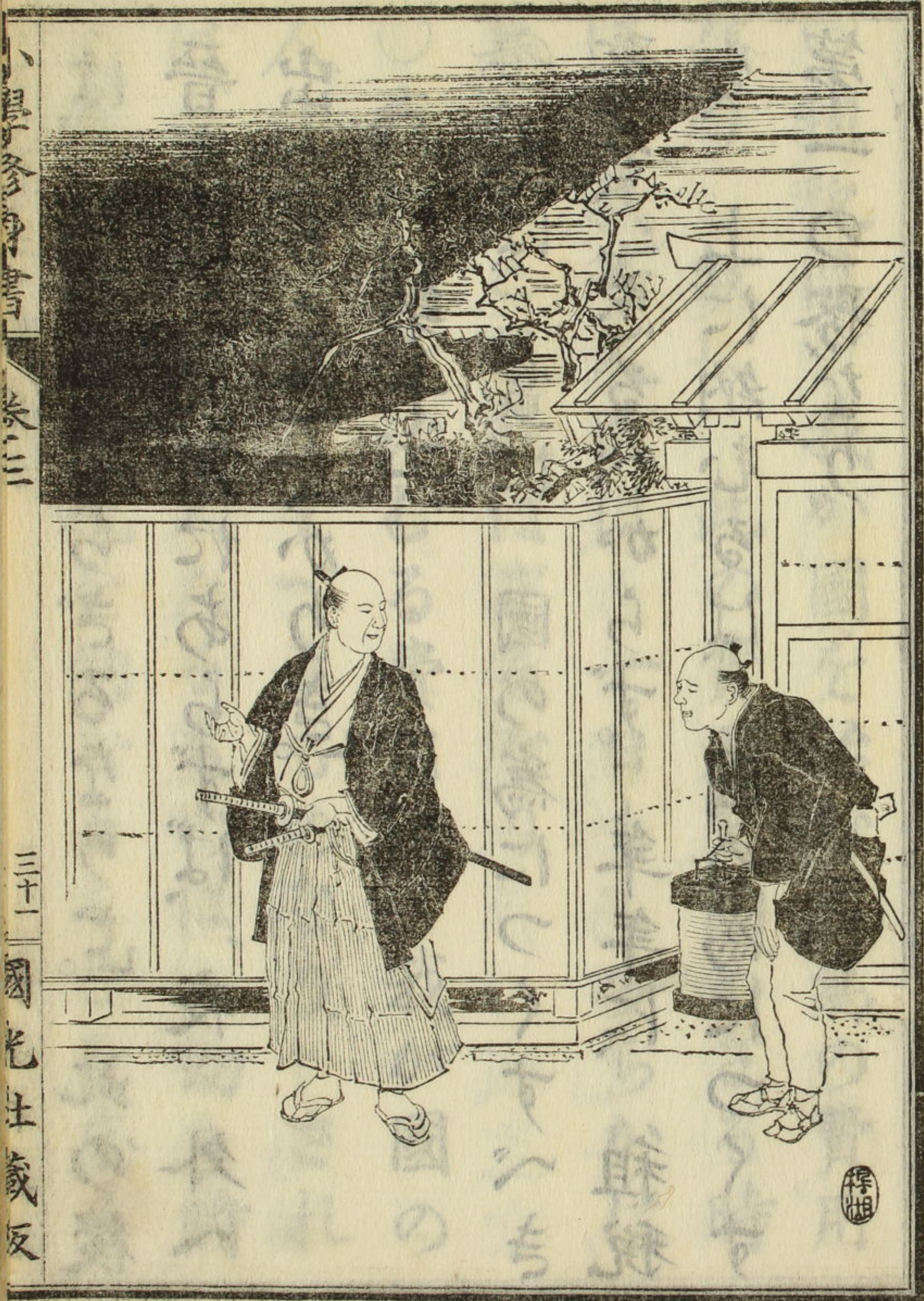
花實ぞ。根を、よく養はば、花

も、實も、年々出来る。明訓一班抄

○細井廣澤と云ふ人は、家貧しく、て、ある人より、二三兩の金をもらひたり。たまぐ、貧書生きたりて、身の不幸をかたりければ、廣澤、あはれに思ひて、其の金をとり出だし、皆、此の書生にあたへたり。



○田邊晉齋と云ふ人、ある日、友人  
 の家に行き、夜ふけて、其の家を出  
 でたり。此のとき、門前に待ち居た  
 るけらいの、いかにも、寒げに見え  
 たらば、晋齋、いたはりて云ひける  
 やう、我、人の處に行きても、ゆた  
 かに食ひ、あたゝかに居りながら、  
 汝等をして、かゝる目にあはしむる



は、慈悲を知らざるなりと。此の後、  
晉齋は、公用にあらずば、夜、外へ  
出づることなかりき。

第十二

○人は、常に、國の爲につくすべき  
務を、忘るべからず。年年に、租税  
を、上に納むるは、國の爲につくす  
第一の務なり。

○租税は、我が國を治むる爲の費用  
なり。故に、此の費用を納めざる時  
は、我等人民は、一日も不安らかに  
暮らすこと能はざるなり。  
○我が國を治むる費用は、我が國の  
人より出だすべきものなり。され  
ば、我が國の人たるものは、幼き時  
より、此の租税を納むることを忘る

べからず  
○民家の積徳は、農事をつとめて、

租税を奉ることを、第一とす。積徳

叢談

○徳川光圀は、常陸、國水戸の城主なりしが、世を譲りて後、西山と云ふ山中に隱居して、幽カに暮らせり。さて、山間を開きて、田畑となし、

又は、近きあたりの田畑を買ひ、下部をして、耕作せしめ、年年の租税も、他の百姓と同トく納めけり。

郡奉行、これを氣の毒に思ひ、すべての百姓よりは、租税を猶豫することありしに、光圀、大に怒り、國家の爲に、租税を納むるに、誰かれの差別あるべからずとて、其の處置の

偏頗なることをいまいめ諭されければ、奉行も道理に服して、其の後は、他の百姓と同様に取り立てたりと云ふ。

小學修身書卷之三終

版權  
所有

明治廿五年六月十五日印

刷 定價金七錢八厘

全。七月十三日出

版

著者 伯爵 東久世通禧

發行者 西澤之助

東京市麻布區本町四丁目八番地

發兌

東京市京橋區築地三丁目廿番地  
國光社圖書部

